



Profile

農業事業 青橋

実家の見能林町は、早場米の産地として知られる県南有数の穀倉地帯。勤務していた阿南市では、阿南市東京事務所長もつとめ、移住促進や阿南市のプロモーションに尽力した。2021年に退職し、農業の道へ。元気に育っている稲を見ると、子どもを育てているような気持ちになるという。今は、米農家としての足元を固めるべく、日々奮闘中。



目指すのは、地域に受け入れられる 持続可能な農業スタイル

「50歳を過ぎたおじさんが、田んぼでは親父に叱られながらやっています」と笑う柏木章宏さん。安定した公務員の道を捨て実家の米農家を継いだのは、高齢化や価格低下で急速に離農する人も増えている現状を見て、「このままでは田んぼがなくなってしまう」という切迫した危機感だった。

高齢化といっても、まだまだ柏木さんの父を始め、米作りの先輩たちの知恵やノウハウはAIでは計り知れないものがある。農地のクセや表情を読みとり、絶妙なタイミングで肥料を施す。米づくりをするうえでは必要なものだ。柏木さんは、そんな先輩たちと一緒に米づくりをすることが荒廃する農地を保全することにつながるのではと考えている。

高齢者も自分の力が必要されていることで、それが自信や生きがいとなり、いきいきと暮らせるようになる。「自身の利益だけを追求するのではなく、地域に受け入れられる、そんな共存共栄の農業こそが持続可能な農業の形」だと話す柏木さん。地域のブランディングにつながる付加価値をつけた商品づくりや新しい流通の形態など、まだまだ考えなくてはならないことがたくさんある。自分の息子に、「次、やれよ！」と胸を張って言えるその日まで、奮闘する日々は続いていく。